「底が突き抜けた」時代の歩き方 252

善は急げ　悪も急げ－文明の衝突

米中枢同時テロについて論評したり、解説するさまざまな言説が溢れる中で、最も多く見出される言葉の一つに「文明の衝突」という言葉があった。この言葉は、サミュエル・ハンチントンが９３年に『フォーリン・アフェアーズ』誌で発表した国際政治理論（に関する論文）の題名であり、当時反響を呼び、同題名の著作もベストセラーになった。ハンチントンのこの理論については、『現代思想フォーカス８８』（木田元編、新書館発行）のなかで簡潔に要約（瀬嶋貞徳）されているので、そのまま全文引用を試みる。《かれは、冷戦後の世界がグローバルな国際社会の一体化へ進むという当時の一般的な見方にたいして、それがいくつかの文明圏に分裂し、それらの対立・衝突が世界秩序を築いていくであろうと予測した。コソボ紛争や東ティモール紛争、あるいは南北朝鮮首脳会談の実現などは彼の予測の正しさを証明することになった。

１９８０年代の共産主義世界の崩壊後、民族間のもっとも重要な違いは、イデオロギーではなく文明の違いとなった。冷戦後の世界は冷戦時代の三つのブロックではなく、中国、日本、インド、イスラム、西欧、東方正教会、ラテンアメリカの七つ（あるいはアフリカ文明を加えて八つ）の文明に分けられる。この新しい世界においては超大国同士の抗争にかわり、文明の衝突が起こるようになる。同じ文明に属する国家やグループは力を合わせてその「同類国」を支援しようとする。そのため文明の異なる国家やグループのあいだで暴力闘争がひとたび起こると、それは同類国を巻き込んでエスカレートする可能性があり、きわめて危険である。逆にイデオロギーによって引き裂かれていたとしても、文化的に一体感をもつ人びとが連帯し、統一へと向かう。

現在もっとも強力な文明である西欧文明は、中国やイスラムの台頭にともなって相対的な力が衰えつつある。冷戦後の世界においては西欧文明と非西欧文明の相互作用が中軸となっていくであろう。来るべき時代の平和は、こうした世界の主要文明の政治的・精神的指導者たちの理解と指導力にかかっている。文明の衝突こそが世界平和にとって最大の脅威であり、文明に基づいた国際秩序こそが世界戦争を防ぐ安全装置なのである。》

もし今回のテロが少しでもアラブ世界と欧米世界との対立に起因していると考えるなら、「文明の衝突」の構図におけるイスラム文明と西欧文明の衝突として捉えられるのは間違いない。もちろん、「文明の衝突」の構図を念頭に置く論者たちの多くは、たとえば東大教授の山内昌之の主張にみられるように、《テロリストの狙いは、イスラム世

界対西欧世界、あるいはイスラム世界対自由世界・先進国という構図をなんとか作ろうということだろう。しかし、こうした「文明の衝突」に持っていこうという挑発に乗ってはいけない》(『サンデー毎日』０１．１０．７）というものである。その挑発に乗って、「文明の衝突」が本当に起こってしまうなら、第三次世界大戦への突入は避けられない。だから、大戦を回避するためにも、《イスラム世界の中にいる、テロに対して批判的な良識ある市民の世論と、日本を含めた西側が結束する必要がある。そのためには、イスラム世界の社会問題となっている貧困、人口、環境問題を解決しなければならない》し、《アメリカにとって根本的な問題解決策は、中東和平を進めることだ。アメリカは超大国として、軍事だけでなく外交の論理でも責任を果たしてもらいたい》（以上、同前）ということだ。

「文明の衝突」が覗き込んでいる人類全体の危機をどうしても回避しなくてはならぬという主観的な願望はわからぬでもないが、しかし政策研究大学院大教授の青木保も指摘（朝日新聞０１．１０．１７）するように、今回のテロが明らかにしたのは、《目も眩（くら）むような世界の亀裂である》。テロ撲滅はこの「世界の亀裂」に真に向き合うことであって、テロの発生を力で封じることではけっしてない。青木氏は続けて書く。《ここに示された二つの世界の断絶の深さに戦慄を覚えずにはいられない。現代の発展と繁栄の象徴であるマンハッタンのハイテク超高層ビルの世界とオサマ・ビンラディンとアルカイダのアフガニスタンの世界である。この二つの世界の映像がテレビで交互に映し出されるのを見るにつけ、そのあまりにも隔絶した「違い」に圧倒される。そこには現代のあらゆる困難な問題が凝縮されている。人間と社会を分断する差異が、冨と貧、発展と停滞、文化（宗教、言語、民族、地域など）の違い、情報と知識の落差、政治の秩序と混乱、自由と抑圧などの面でもっとも極端に現れている。》

この「世界の断絶の深さ」がテロによって、《イスラムの敵アメリカを倒せのスローガンに対して、自由主義・民主主義の敵テロリストを殲滅（せんめつ）せよの大合同を呼びかける主張、オサマ・ビンラディン的イスラム過激主義か、「ゴッド・ブレス・アメリカ」の自由主義か、どちらをとるか。正義か悪か。世界の二者択一的な二極化が問答無用の形で進行してい》く「世界の矮小化」に、彼は危惧を抱く。彼の考えでは、《少なくとも前世紀９０年代以降の世界は、グローバリゼーションの進行の中で世界の多極化・多中心化が展開し、アメリカを含めた多くの国や社会は多文化主義的傾向を強めてきた。それは東西冷戦下の世界の二極化の否定であり、新たな世界の発展の方向を示すものだった。》それなのに、一体どうなってしまったのか。《「IT 革命」が華々しく喧伝（けんでん）される新世紀は、何よりもコミュニケーションが豊かに行われる情報の時代になるはずであった。それが、破壊と暴力によるメッセージの応酬でしか行われない。この貧困をどう捕らえたらいいのか。》

テロが明らかにした「目も眩むような世界の亀裂」の深さには、いうまでもなく多様性は存在しない。多様性ではなく、異質性のみが存在している。冷戦後の世界がもし各々の多様性へと向かいつつあったなら、今回のテロなどによって多様化が脅かされることはありえないし、その基盤が突き崩されるようなこともない。たとえ多様化の萌しがあったとしても、テロで突き崩される程度の多様化でしかないということだ。しかし本当に世界は多様化へと向かっていただろうか。多様化へ向かっていくだろうという期待や思惑の裏で、実際はプラグマティックな合理性の追求と画一的な味で食文化を破壊している、あのマクドナルド商法に象徴されるアメリカニズムが凄まじい勢いで均質化を図っていたのではなかったか。作家の石原慎太郎は産経新聞（０１．．１１．５朝）で、《アメリカに都合のいいスタンダードをもって世界スタンダードとする節》へのイスラム世界からの反発について述べている。

《キリスト教世界を代表する欧米の後押しで誕生したイスラエルという国家の、歴史に照らしての地理的な正当性の問題。加えて、アラン・フリードマンの詳細な報告にあるように、レーガン時代から綿密に画策された湾岸戦争の結果実現したアメリカ軍のサウジ駐留も含めて、冷戦後の唯一超大国アメリカによるもろもろのガリバー的な独占支配への世界中からの反発。

アメリカの一方的な金融戦略で押しつぶされた東アジア経済圏にもモスレムは多く、特にイスラム世界で最大の人口を抱えるインドネシアは、アメリカの代理人ともいえるIMF の一方的で拙劣な処方のお陰で通貨のルビアは暴落してしまいその遺恨は鬱積している。

総じて世界に蔓延しているアメリカに対する社会心理は、強大な勝者への鬱屈した反発であり、勝った側の者がどう措置せぬままつのる一方の、貧富の激しい格差に対する恨みでしかない。これほど単純な心理的図式はありはしまい。》

更にこの上に、冷戦時代には主に軍事情報の収集にあたっていたが、現在ではアメリカなど英語圏国家の外交や経済活動のために政府の要人や民間の通話まで、要するに「世界中の通信を傍受している」とみなされている、通信傍受システム「エシュロン」も象徴的に加えてみたくなる。ここでいわれていることは、もはや「冷戦後の唯一超大国アメリカ」を相対化する国家組織はどこにも存在しなくなったということであり、このことは相対化をもたない多様性は存在しないことを意味する。テロは多様性が死滅しつつあるか存在しないことの証であり、青木氏のいう、テロ後の「破壊と暴力によるメッセージの応酬でしか行われない」貧困と、テロの貧困とは同質なのである。つまり、「破壊と暴力によるメッセージの応酬」それ自体がテロにほかならない。

多様性などどこにも垣間見られない「オサマ・ビンラディン的イスラム過激主義か、『ゴッド・ブレス・アメリカ』の自由主義か」の問答無用の「世界の二者択一的な二極

化」の進行は、図式通りの「文明の衝突」を描きつつあるようにみえる。青木氏は《文化の違いは摩擦や紛争を、時として招くかもしれない。そうしたものをおこさないものが、文明である由縁の筈だ。衝突するものなど文明ではありえない。文明とは「人間の智徳の進歩」とかつて「文明論之概略」の著者が喝破したことを、改めて思い起こしたい》と力説するが、残念ながら現実の世界は、人類が築き上げてきた「人間の智徳の進歩」としての文明などどこにあるか、と問いたくなるような様相を呈している。テロリスト側が剥きだしの荒々しい野蛮さを露出していたなら、テロ撲滅を掲げるアメリカは高度な野蛮さを発揮しているだけではないのか。いすれにせよ、そこに「文明の衝突」どころか、文明すら窺うことができない。

アメリカによるアフガン攻撃は当然のことながら、多数のアフガン人を巻き込んで進行している。いくらタリバンを攻撃目標として限定していようとも、戦闘となれば一般市民を巻き添えにしない筈がない。アメリカが戦争の当事国となったベトナム戦争、湾岸戦争、コソボの空爆などでも多くの民間人の死傷者が出た。タリバンでもアルカイダでもないアフガン人の死者は、テロで巻き添えになったニューヨークの民間人の死者と同等なのであり、いくらテロ撲滅の大義を掲げようとも、アフガン攻撃による民間人の死者にとっては全くテロと変わらない。アメリカがもし文明国だとするなら、非文明的なテロを撲滅するのに、高度な文明国にふさわしいやり方で行うことが問われていた筈である。テロ撲滅をテロと同等のやり方で行うなら、テロを承認するだけのことであろう。文明は物質的な繁栄の度合いにおいて測られるものであるよりも、むしろ一個人の生の充実の度合いにおいて測られるものではないのか。

評論家の西部邁は産経新聞（０１．１０．１９）で、《日本の友（アメリカ）がその敵（テロリスト）を作り出し、さらにはその敵をかつてない野蛮に誘い出し》、アメリカはテロ撲滅を掲げる戦争へと自らを駆り立てていった。しかしながら、《国家や国家軍がテロルへの報復を遂行するのもまたテロルでしかありえない。なぜといって、世界法も世界警察も世界法廷も、単に未熟であるのみならず、世界をそこで生きるに値せぬ平板にして均質な空間と化すという意味で、完成されてはならぬものだからである。今アフガニスタンをめぐって進んでいるのは、未確認組織とアメリカ同盟事とのあいだのテロルにほかならない》といいきる。

もちろん、氏の立場は、《アメリカの行う（テロ撲滅のための）テロルという自己矛盾的な行動に日本国家が協力するほかない》というものだが、いまや「文明の衝突」はテロにはテロを、の次元で進行していることは間違いない。世界のイスラム教徒にとって最も「神聖な月」とされるラマダン（断食月）の期間中もアフガン攻撃が続行されたり、戦闘が長期化してアフガンの民間人の被害が拡大していくなら、テロ対テロの次元が一気にイスラム世界にまで広まることは充分考えられるし、その可能性も高い。明白

なのは、死傷者が激増していくということだ。暴力団の抗争とどこが違うというのだろう。福沢諭吉のいう「人間の智徳の進歩」などそこには微塵もみられない。人間の野蛮さの進歩が大規模に展開されているだけだろう。しかし、見かけにとらわれてはいけない。真の野蛮さはもっと深く隠されている筈である。我々はいつも映像化されたものだけを見せつけられているが、本当に残酷な舞台裏は絶対に映像化されることなく、野蛮さの極みをもって奥深く進行しているということを忘れてはいけない。

２００１年１１月７日 記
ＴＯＰに戻る